

かじってみよう社会学Ⅱ 第1講 『親の顔が見たい』

皆様、「みんなの学校」へ、ようこそおいで下さいました。心から歓迎と御礼を申し上げます。先月から、ブルーになりがちな毎週月曜を皆さんと一緒に迎えられるのがとても嬉しいです。

第1月曜日は講座名『かじってみよう社会学Ⅱ』です。生活に役立つ「地域社会と利他」を主テーマに、社会学の視点から日々の生活や地域社会での出来事を考えてみたいと思っています。第1講目の今日は、何か不祥事をしてかしたり、常識的な行為から少々はずれた振る舞いをしている様子をみたときなど『親の顔が見たい』等と言ったりします。これは、前述のネガティブな場面だけではなく、行いを賞賛する場合などでも使われます。

『親の顔が見たい』という言い方は、額面どおり当事者の方の親御さんの顔を見たいという意味では使われていません。今日にしている行為を非難する、否定する場合や評価する言葉として用いられます。では、なぜ親の顔が見たいと言うのでしょうか。ここから社会学が登場します。『社会化』です。

社会化(socialization)とは、「ひとが自分の所属する社会や集団、またはこれから所属しようとしている社会や集団に共有されている流儀・作法を学習し、自分のものにしてゆくプロセス」をいいます。以下、二つの辞書での説明を掲載します。

①「社会の基準や価値を採用したり、社会的相互作用に必要な技能を獲得したり、受け入れ可能な役割を採用することを学習することによって、子どもが社会に統合されていく過程をさす」(人間理解のための心理学事典)。

②「個人が他者との相互作用のなかで、彼が生活する社会、あるいは将来生活しようとする社会に、適切に参加することが可能になるような価値、知識、技能、行動などを習得する過程」(新社会学事典)。この様に説明されています。

社会化(学習過程)は大きく二つあります。第一次的社会化と第二次社会化です。

第一次社会化は、生まれて成長するなかにあつての学習過程です。社会規範、生活習慣、言語など、その社会全体に共通で、そして最も基本的なことからを学習することをいいます。社会化の対象は子ども、社会化の担い手は、まずは家庭、そして近隣社会。保育園や幼稚園、学校と成長に合わせてだいに広がっていきます。第一次社会化を通じて、一個の動物として生まれた「ヒト」は、この過程を通して「人間」になり、男や女(最近はこうした区別の言い方も避ける傾向がありますが)になっていきます。**いわゆる「しつけ」は、第一次社会化の最も重要な局面です。**

第二次社会化は、ある集団に固有の、だが集団には共通な規範、価値観、行動パターンを学習する過程です。貴族社会、会社、暴力団、宗教団体、政党、軍隊等々、それぞれに固有の作法や気風があります。新参者は、そうした作法や気風をしっかり身につけることで、はじめて一人前のメンバーとして認められるのです。

この様に社会化は、人間を社会や集団の一員として形成し、社会や集団のために新しいメンバーを補給し、社会や集団に秩序をもたらす決定的に重要なプロセスなのです。

これは、2021(令和3)年11月1日から始まった『かじってみよう社会学』で既に学んでいることです。私たちは、特段「社会学」等と言わなくても、生活の中で意識するしないに関わらず、あたりまえのように振る舞っている中に社会学が入り込んでいます。別の言い方をすれば、「私たち個人と社会との関わりか方」を少々小難しく説明しているのが社会学です。

今日取り上げた「親の顔が見たい」は、「しつけ」という一次社会化が、放置されていたのかしっかり行われていたのかを、この様な言葉で表しています。特段、社会学のテクニカルターム(専門用語:学問の世界でしっかり定義され会社にブレの無い言葉)である「一次社会化」という言葉を知らなくとも、生活の中であたりまえのように「一次社会化」に関する言葉を使っています。それだけ、社会学は私たちの生活の中に組み込まれているのです。

二次社会化の文脈になると、あの人は「体育系だから」「公務員だから融通が効かない」等々、どのような職場で教育されたのかや過ごしたのかで、その方の印象を決めつけたりすることはよくあるように思います。また、「田舎の子だから純朴で都会の子はスレている」等々も良く聞きます。

地域社会の持つ雰囲気も「社会化」と関係するように思っています。その地域の構成員が、如何なる地域を目指して努力を重ねているかによって、その地域の雰囲気や振る舞いが変わってきます。四国八十八ヶ寺歩きお遍路をして、私はそれを強く実感しました。地域社会は、私たち一人ひとりの振る舞いの現れなんだと確信したのです。

それらの印象を万人にあてはめて決めつけることには議論のあるところですが、社会化過程を経ることで、個々人がヒトから人へと成長し、更にはその職場や地域社会にあった振る舞い、求められる振る舞いをするようになっていくということは、その強弱はあっても現存するように思います。

私たちは、長い期間、他者との関わりから経験則的に社会化(子どものころの典型は「しつけ」)の存在を知り「親の顔が見たい」という言葉を生んでいるのだと思います。

この言葉は、結婚するときにも使われているように思います。本人だけではなく、その親と会ってから判断したいという親の気持ちは、この様なところにもとがあるように思います。そして、それはあながち間違っていない(一概に間違いとはいえない)親の心情のようです。当事者は、気持ちが昂ぶり「恋は盲目」になっていたりするので「あばたもえくぼ」状態です。そのような時、誰よりも本人を知っている親の見た目は的確です。その目は、その親の振る舞いから結婚相手と息子娘との相性を見抜く生活の知恵なのではないかと思っています。相手の親とまでは行かなくとも、相手とお会いして、娘息子との相性を親が見極めるということはとても大切だと思っています。

ちろん、最終的に決める(選ぶ)のは本人です。なので、親は、息子娘の判断材料(判断の視点)を持たせてあげることが親の役割だと思うのです。

そうは言っても、昨今は、本人の意思が尊重され、結婚を決めてから、親に合わせる人が多いように思います。本人の気持ちが最優先というのは分かりきったことですが、「社会化」のことだけでは

なく、子どもを一番知っている親の話の聞くというのもあっていいように思うのです。これから結婚をしようとする人、またその親は、頭の片隅に「社会化」という言葉を置いていて損はないように思います。

また、地域社会も同様です。地域社会の持つ雰囲気や近隣関係は、二次社会化の構成員である私たち一人一人が関わり醸し出しているのだということを知っておく必要があります。そういった意味で、私たち一人一人の振る舞いでも地域社会は変えることが出来るのです。「ハチドリのひとつく」です。



二輪草(泉が岳 2025-05-04)